

もりした
モリ下遺跡

所在地 新城市八束穂
(北緯34度55分33秒 東経137度32分4秒)
調査理由 第二東海自動車道横浜名古屋線
調査期間 平成20年9月～平成21年3月
調査面積 3,100㎡
担当者 宮腰健司・樋上昇・岡久雅浩



調査地点(1/2.5万「三河大野」)

調査の経過 発掘調査は、第二東海自動車道横浜名古屋線の建設に伴う事前調査として、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境 本遺跡は新城市のほぼ中央部に位置し、地形的には、雁峰山から派生する尾根筋の南西側緩斜面に立地している。遺構検出面での標高は約85mである。

調査の概要 調査区は西がA区、東がB区である。検出した遺構は縄文時代・古墳時代・鎌倉～戦国時代の3時期である。

縄文時代 縄文時代の遺構は、A区に分布し、土器棺墓の可能性のある後期前半の深鉢が横倒しに入っていた土坑450SKのほか、晩期の土器が出土している遺構も認められる。

古墳時代 古墳時代前期が本遺跡において最も遺構が重複する時期で、A・B区合わせて、約140棟もの竪穴住居を確認した。地形的に高いB区は遺存状況がよく、2209・2067・2682・3124SIなどでは、床面で幅広周溝を検出した。また、2067・2410SIからは、欠山期の土器がまともに出て出土している。全体的に、長辺が3m以下の小型の住居が多い点がこの集落の特徴である。

鎌倉～戦国時代 鎌倉～戦国時代では、古墳時代前期の竪穴住居によく似た竪穴状遺構25基を調査区全域で確認した。遺物は少ないが、青磁碗片・天目茶碗片・土師器小皿・山茶碗などが出土している。
(樋上 昇)



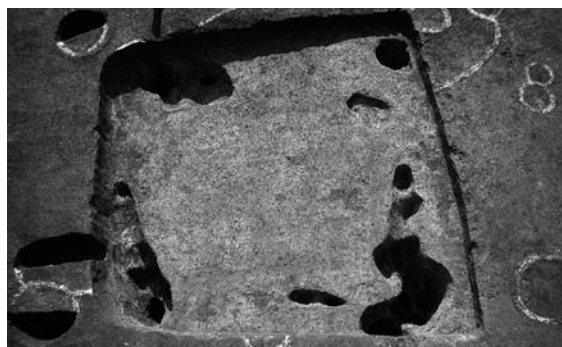
A区全景



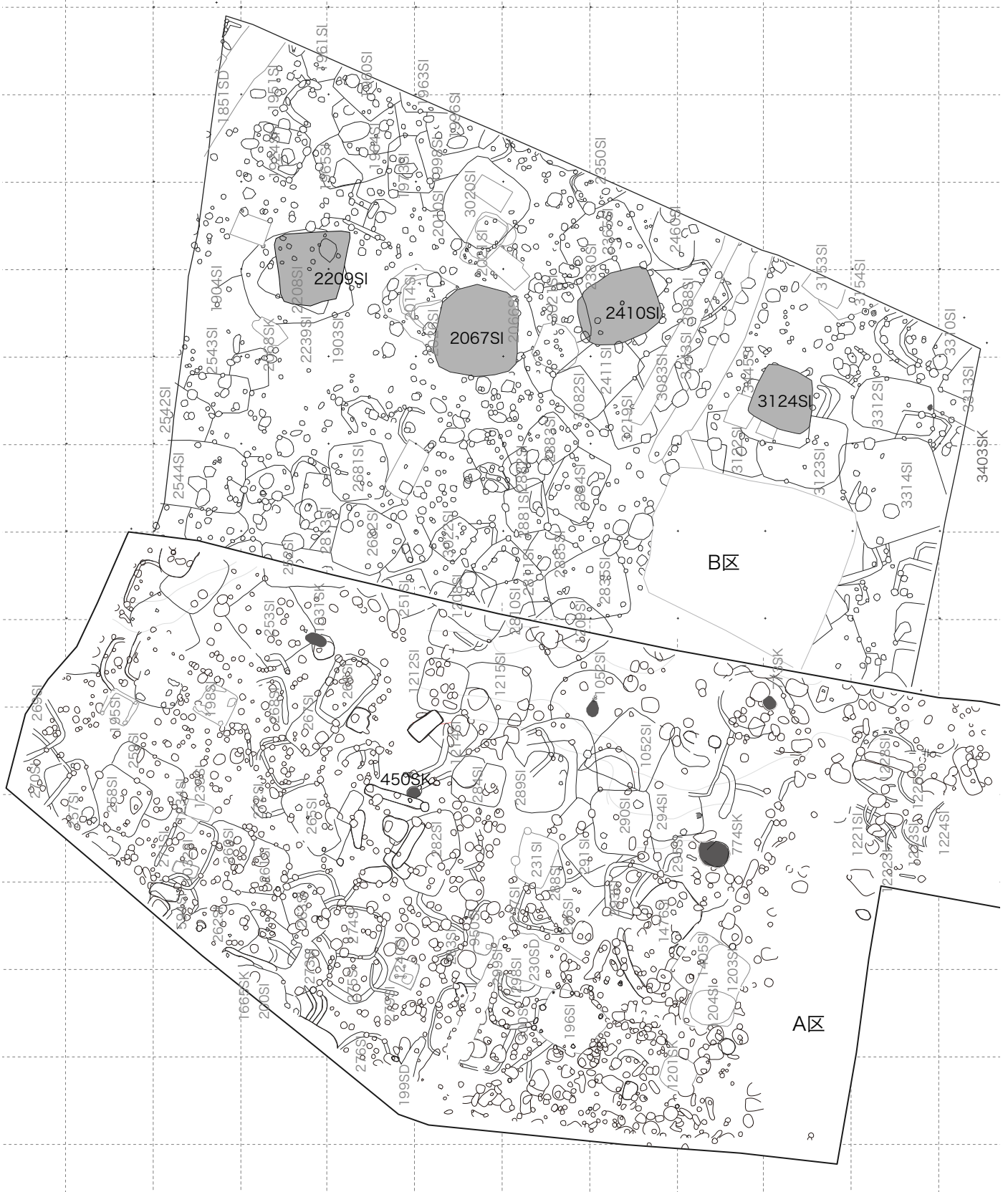
縄文後期前半の土器棺墓? 450SK



古墳前期の竪穴住居 2682SI(幅広周溝検出状況)



中世の竪穴状遺構 198SK



遺構全体図(1:300)